

Hyporesponsiveness to erythropoiesis-stimulating agent as a prognostic factor in Japanese hemodialysis patients: the Q-Cohort study

江里口, 理恵子

<https://hdl.handle.net/2324/1500444>

出版情報 : 九州大学, 2014, 博士 (医学), 論文博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)

(別紙様式2)

氏名	江里口 理恵子			
論文名	Hyporesponsiveness to erythropoiesis-stimulating agent as a prognostic factor in Japanese hemodialysis patients: the Q-Cohort study			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	松尾 恵太郎
	副査	九州大学	教授	谷 憲三朗
	副査	九州大学	教授	鴨打 正浩

論文審査の結果の要旨

慢性血液透析患者において、エリスロポイエチン製剤投与に対する反応性が生命予後と関係する可能性がかねてより指摘されてはいたものの、その実態は必ずしも明らかでは無かった。本研究では、多施設共同の前向き患者コホート研究データを用い、この関連を検討している。

申請者は、2006～2007年福岡県、佐賀県の血液透析を実施している39施設において同意が得られた18歳以上の外来透析患者コホート(Qコホート、n=3598)を対象に、エリスロポイエチン製剤投与に対する反応性 ERI (erythropoietin resistance index)と全死亡、心血管イベント発生との関連を検討した。まず ERI の値を3分位に分け、そのレベルとエンドポイントの関連を多変量解析により検討したところ、4年全生存率が ERI 低値群では 87.5%、中等値群で 82.9%、高値群では 72.0% (logrank 検定 $p<0.001$) と有意な差を認めた。この関連は多変量解析により交絡要因を調整した後も認められ、ERI 低値群に対する高値群のハザード比は 2.23(95%CI 1.76-2.81)であった。同様の関連は心血管イベント発生との間でも認められた。更に、高値群と低・中等値群別に透析量の予後への影響を検討し、透析量(Kt/V)が 1.57 以上の場合の予後は、特に高値群において明らかであることを見いだした。申請者らは ERI とその生命予後への関連に関して、炎症・低栄養等を介したものである可能性を考察した。

以上の成績は、Journal of Nephrology 誌に掲載され、この方面の研究として意義ある成果であると考えられる。本論文についての試験において、研究目的、方法、研究結果についての説明を求めた。さらに、各調査委員より専門的な観点から各種質問を行い、概ね満足すべき回答を得た。

以上より、調査委員合議の結果、試験は合格であると判断した。